

## 保育所等訪問支援 総括

(別紙4)

○事業所名	合同会社にぬふあ一星		
○保護者評価実施期間	2025、8、1	～	2025、8、31
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	88	(回答者数) 23
○従業者評価実施期間	2025、12、1	～	2025、12、31
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	5	(回答者数) 5
○訪問先施設評価実施期間	2025、12、1	～	2025、12、31
○訪問先施設評価有効回答数	(対象数)	100	(回答数) 19
○事業者向け自己評価表作成日	2025、1、5		

○ 分析結果

総括 訪問先施設評価および自由記述から、訪問支援員の専門性の高さ、具体的で分かりやすい助言、関係者間の丁寧な連携が高く評価されていることが確認できる。短時間の訪問であっても現場の状況を的確に捉え、実践につながる支援を行っている点が事業所の強みであり、今後さらに強化・充実を図ることが期待される。

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	訪問支援員の助言や説明が具体的で分かりやすく、現場で取り入れやすい点。	短時間の訪問であっても、授業中の様子や児童の行動、教員の声かけや関わりを丁寧に観察し、気づいた点を整理して伝えることを意識している。現場の負担にならない表現や伝え方を心がけている。	助言内容や観察の視点を記録として整理し、訪問先施設が後から振り返りやすい形でのフィードバックを充実させ、支援の継続性を高めていく。
2	訪問先施設・保護者・児童をつなぐ連携調整の役割が機能している点。	保護者から聞き取った内容や家庭での様子を、訪問先施設へ丁寧に伝え、施設側の意向や現場の状況も踏まえながら支援の方向性を共有することを意識している。	共有内容や連絡方法を整理し、関係者間での認識のずれが生じにくい体制づくりを進め、より円滑な連携につなげていく。
3	課題だけでなく、児童や教員の良い点にも着目した専門的な視点。	専門的な助言に加え、児童の成長や教員の工夫、適切な関わりを積極的に言語化し、肯定的なフィードバックを行うことで、教員が前向きに振り返れる関係づくりを意識している。	肯定的な視点と専門的助言のバランスを大切にしながら、安心感のある訪問支援を継続し、現場の実践力向上につなげていく。

総括 訪問先施設評価および自由記述から、支援の質や専門性は高く評価されている一方で、情報共有の方法やタイミング、支援の進め方の見える化などについて、さらなる工夫の余地があることが読み取れる。事業所としては、これらを課題として捉え、支援の分かりやすさと連携の質を高める取組を進めていく必要がある。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等

1	支援内容や対処方法について、児童本人へ直接伝える関わりが十分でないと感じられる場面がある点。	支援は主に教員や保護者を通して行うことが多く、児童本人の理解度や状況に応じた直接的な関わり方について、整理が十分でないことが要因と考えられる。	児童の特性や発達段階を踏まえ、無理のない範囲で本人へ伝える関わり方を整理し、支援の選択肢を広げることで改善を図っていく。
2	訪問後の支援内容や気づきの共有について、情報量や伝達方法により、整理しにくいと感じられる場面がある点。	訪問時の観察内容が多岐にわたるため、伝える内容が多くなり、要点が分かりにくくなるのが要因と考えられる。	共有内容を要点化し、簡潔で分かりやすい形で伝える工夫を行うことで、訪問先施設が振り返りやすい情報提供となるよう改善を図っていく。
3	支援の終了や縮小に向けた見通しやプロセスについて、関係者間で十分に共有できていないと感じられる可能性がある点。	日々の支援に重点を置く中で、支援の区切りや移行を見据えた説明や振り返りの機会が十分に確保できていないことが要因と考えられる。	支援の経過や成果を整理し、終結や移行の見通しを関係者と共有する機会を意識的に設けることで、納得感のある支援につなげていく。